

マイノリティ女性を知ることが自分を知ることにつながる

岩本 涼子 (IMADR-JCインターン/上智大学4年)

今回、女性差別撤廃委員会日本審査のために私がニューヨークに滞在したのは約10日間であった。審査に向けたロビー活動が主な目的だったが、IWRAP Asia Pacificが主催する、CEDAW 審査での活動に関するNGO向けのトレーニングにも参加し、非常に濃く充実した毎日を過ごした。ジェンダーの問題におけるNGOの役割や、国連の役割・性質、日本の国際社会での位置を実際に体感できたことは大きな糧となった。また、アイヌ、部落、在日、沖縄の女性たち、そして移住女性たちと過ごすことにより、今まで自分が日本のマジョリティ女性として見てこなかった現実を垣間見ることができ、自分が何者であるか考え直す第一歩となった。

私たちは文字通り1日中、会議の合間に委員をつかまえてはマイノリティ女性についてロビー活動をしていた。国連内の食堂の一角を拠点とし、資料を広げ何度も作戦を練り直し、より効果的なロビー活動をめざした。たとえば、委員たちの専門分野や関心事、「NGO寄り」か「政府寄り」かということもそれぞれ異なり、どの委員がマイノリティ女性の問題により耳を傾けてくれるか判断し、ターゲットを決める必要があった。「忙しいから」と話を聞いてもらえないこともあり、話しかけるタイミングも重要だった。言葉の壁の問題も大きく、皆で一緒に英語で話しかける練習をしたりもした。

ロビー活動を通し、日本のマイノリティ女性の存在・現状について、私が想像していた以上に知られていないと気づき衝撃的だった。また、中にはホモフォビア（同性愛嫌悪）を持つ委員もいると聞き、それも驚きだった。国連の委員と言っても知らないことも多ければ偏見もあると知り、いかにNGOによる情報提供が重要か思い知らされた。ロビー活動をせず待っているだけでは国連は何もしてくれない。あくまでも国連は“道具”に過ぎず、マイノリティ女性自身がそれを“利用”することが重要だということ学んだ。

審査本番で委員からマイノリティ女性について言及があった時はひとまず安堵した。しかし、日本政府の回答は一貫して私たちが求めるものではなく、大変失望し、悔しさと悲

しさにいっぱいになった。また、審査前、トレーニングと一緒に参加していた他国のNGO活動家に「日本は先進国なのに女性差別があるの？ 本当にびっくりした！」と言われ、本当に恥ずかしい思いをした。委員からも厳しい指摘が相次ぎ、それに対する日本の回答には時折笑いまで起きた。私が今年の4月まで行っていた就職活動中、「君と同じ能力の男子学生が来たら彼を採る」と言われ憤りを覚えた経験があるが、今回の審査で、自分が女性の権利においては後進国に生まれ育ったのだということを改めて痛感せざるを得なかった。

それでも、私は日本国内ではマジョリティ女性であり、「女性」であることから不利益を被る経験はあっても、その他の部分で差別を受けることはない。私は去年の5月まで約1年間米国に交換留学をしていた。その時、私自身もマイノリティ女性として生活したが、自分には日本に帰国すれば大丈夫だという安心感がつねにあった。しかし日本のマイノリティ女性たちにはそれがない。米国留学中、ちょうどオバマとクリントンが民主党の大統領指名候補争いを戦っており、マイノリティが立ち上がるさまを目の当たりにしていたが、日本国内の、自分のごく身近にもそのような人たちが居ると気づいた時、はっとした。私は、日本に住む人間にとって文字の読み書きができることが特別だと思ったこともなかったし、友人と「投票に行くのが面倒くさい」という会話をするにも何の抵抗も感じなかった。自分に与えられていたすべてが当たり前で、それが実は“特権”だったとは思ひもしなかった。マイノリティ女性を知

ることが、自分を知ることにつながる。その気づきが今回私にとって一番の収穫であり、今後さらに理解を深め少しでも役に立てよう努力したいと強く思った。

(いわもとりょうこ)

事前にIWRAPのトレーニングに参加したメンバー、および日本選出の林陽子CEDAW委員 (IMADR-JC理事)とともに (右端が筆者)。

